

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007 年度 ～ 2009 年度
 課題番号：19720156
 研究課題名 (和文) 古代ローマ帝国における言語接触と西部地域におけるラテン語の浸透過程
 研究課題名 (英文) Language contact and Latinization in the Roman Empire
 研究代表者
 志内 一興 (Shiuchi, Kazuoki)
 武蔵野音楽大学・音楽学部・講師
 研究者番号：60449288

研究成果の概要 (和文)：

本研究では、現代国際社会の縮図とも言うべき古代ローマ帝国時代、その領域内における諸言語の存在に焦点を当て、また特に帝国西部地方のラテン語化に注目して考察を進めてきた。その中でこれまで我が国ではほとんど等閑に付されてきた、古典語 (ラテン・ギリシア) 以外の言語の存在についての認識を深め、大学等研究機関における講義などを通じそれに関する情報を発信し、また特にグローブザンクの陶工文書、及びバースの「呪詛板」文書といった、本研究課題に関わり、そしてこれまで我が国において紹介されたことのなかった文書群を初めて取り上げて研究したことは、我が国の古代ローマ時代研究史の中で画期的なことであった。

研究成果の概要 (英文)：

In this research programme, we have dealt with the language contacts in the Ancient Roman Empire, which we can fairly assume as a prototype of today's international community. In addition, especially we have focused on the phenomena 'Latinization' in the western part of the Empire. Many indigenous languages (other than the Classical Languages: Classical Greek and Latin), which have been almost totally ignored in historical researches in our country, have come to light in this research, and the results of the investigations of such languages are actively communicated to the researchers and students in every possible way, especially in the classes of the Universities. Pottery Documents from La Graufesenque in southern France and Curse Tablets from Bath in England, which are introduced by us for the first time into the academical field of our country, are very important sources for the development of historical research of Roman Empire, and we hope our contribution will stimulate relating interest and investigations subsequently.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	800,000	0	800,000
20年度	500,000	150,000	650,000
21年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	300,000	2,100,000

研究分野：古代地中海世界史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：

- ①西洋史
- ②地中海
- ③言語接触
- ④文化接触
- ⑤ローマ帝国
- ⑥地中海
- ⑦マルチカルチュラル
- ⑧文化変容

1. 研究開始当初の背景

国家による言語普及の推進、という思想・装置を持たなかった古代ローマ帝国の西部地域に、如何なる過程を経てラテン語が普及し、その後の中世ロマンス語の世界を作り出し、現在の言語状況につながったのか。このテーマに取り組むのが、本研究の基本的目的であった。またこれまでの「古代ローマ史」研究の中では、ローマを中心とした視点の副産物として、ローマ人の言語「ラテン語」及び古代地中海世界の共通語「ギリシア語」のみが存在するものとして扱われ、それ以外の言語に関する興味・関心は無いに等しい状況にあった。

2. 研究の目的

本研究では、上述のような問題意識を背景に、現在のラテン系言語の拡がり、という言語状況をローマ支配がもたらした当然の帰結と目して前提視するのではなく、ローマ帝国における言語の拡大の中に潜む複雑なプロセスに目を向けることで、さらにローマ支配を生きた人々の実態に迫ることを最終的な目標に据えた。

3. 研究の方法

(1) 初年度には、南フランスへの研究旅行を実施し、ミヨー市のラ・グローフザンク遺跡という、後1世紀の西地中海世界における陶器製造の中心地を訪れた。そこで発見されている陶器片上の文字の言語から、当時当地にあった陶工コミュニティで使用されていた言語を反映する、文学史料などには現れない実際の言語使用に関する多くの情報を引き出すことができた。また我が国の大学図書館等にはあまり所蔵されていない、古代地中海世界において使用されていたギリシア語

とラテン語以外の言語に関する資料集を中心に書籍の購入を進め、多くの情報を集めることもできた。

(2) 二年目には、夏期休暇を利用してトルコ南部（リュキア地方）に赴き、ギリシア語とリュキア語の言語接触という類例について認識を深めた。さらにこうした活動の中から特に、イタリア半島におけるラテン語以外の言語への意識・理解が高まり、エトルリア語、サベッリ（オスク・ウンブリア）語、ヴェネト語などの文字資料収集、解読、検討を行い、それら言語とラテン語との接触の様態の考察を行った。

(3) 三年目には、ローマ支配時代にラテン語の幅広い浸透の見られた、北アフリカ地域（チュニジア）への研究旅行を実施し、その地域における土着語（フェニキア・カルタゴ語、リュビア語）とラテン語の接触の様態を確認し、また次いでエジプトにも赴き、その地のエジプト語、ギリシア語、ラテン語三言語使用の状況を調査した。また一方で北にも関心の幅を広げ、ブリタンニア（現イングランド）で発見されている「呪詛板」文書の検討をも行い、そこに示された言語の研究を通じ、ブリタンニアへのラテン語普及状況を考察した。

4. 研究成果

限られた予算の中で効果的に現地踏査を実施し、必要な書籍の購入を進め、一定の成果を収めることが出来たと自負している。

特にグローフザンクの陶工文書、及びパースの「呪詛板」文書といった、本研究課題に関わり、そしてこれまで我が国において紹介

されたことのない文書群を初めて取り上げて研究したことは、我が国の古代ローマ時代研究の流れの中で画期的なことであったと信じる事が出来る。またさらに、これまで我が国ではほとんど等閑に付されてきた、古典語（ラテン・ギリシア）以外の言語の存在についての認識を深め、大学等研究機関における講義などを通じそれに関する情報を発信できたことは、本研究課題への補助を通じて成すことの出来た、大きな貢献であったと信じる。その具体的成果を、講義等を通じた公表と、雑誌等を通じた公表に分けて説明する。

(1) 平成 19 年度から平成 21 年度にかけ、東京外国語大学において「古代史料を読む」ことを主題とした授業を担当し、副題として「多言語併存社会としてのローマ帝国」と掲げ、ローマ帝国、特にイタリア半島を含む西半に存在していた土着言語の紹介、解説、解釈などを行った。具体的には、イタリア半島のエトルリア語、オスク・ウンブリア語、ウェネト語、ガリア語、ケルティベリ語（イベリア文字）などを取り上げた。またブリテン島のラテン語化を考えていく上で重要な史料であるウィンドランダ木簡文書も取り上げ、その解説を行っていった。

また同じくブリテン島のラテン語化を考える上で大変重要な史料である、世界遺産都市バースで発見されている「呪詛板」文書の解釈を行い、2010 年 6 月に山口大学で行われた日本西洋古典学会において、その文書の紹介及び検討を、我が国において初めて行った。

(2) 次いで雑誌論文により公表された成果を説明する。

2007 年の *KODAI* 誌上に公表された成果では、本研究課題の背景を明らかにし、そこでは小アジアで発見されているギリシア・ラテン二言語併用碑文を素材として取り上げた。そして手法として「社会言語学」を応用し、その手法を古代の碑文解釈に適応する、という、我が国では類例のない試みを行い、碑文に用いられた「言語」の選択そのものから何らかの事実を読み取ろうと試みた。

次いで 2008 年、『神は細部に宿り給う』という論文集の一篇として公表した論文の中では、南仏のラ・グローフザンクという陶工コミュニティで後 1 世紀に作成された文書を、我が国において初めて紹介して取り上げ、その文書の文言から、ガリア（現フランス）におけるラテン語の浸透という問題を正面から考えた。

また 2009 年に『歴史と地理』誌上に公表した成果は、ブリタニア（現イングランド）

のバースという、古代の温泉保養地の源泉湧出池から出土した、古代の比較的慎ましやかな財産しか持たない一般の人々の生活・思考を背景とした「呪詛板」文書を、やはり我が国において初めて紹介した。その検討内容を更に発展させ、2010 年 6 月に「日本西洋古典学会第 61 回大会」において、その文書の中から読み取れる、「ローマ化」「ラテン語化」のプロセスを検討した。

また 2010 年 6 月に公表した、『古代地中海世界のダイナミズム』と題された論文集の一篇は、古代ローマ世界の暦を題材としながら、古代世界の文化的多様性を強調した。

昨年、本年度以降の新たな補助に応募したものの、残念ながら不採択に終わってしまった。今年度もまた、本研究の興味関心を更に継続して追求していけるよう、再び応募する予定である。

今回三年にわたる若手研究 (B) の補助を通じ行ったことは、まずローマ帝国における言語状況の全体像を描き、それを認識するという予備作業としての性格が強く、その目的に関してはおおむね達成できたものと思う。今後は特に、本研究課題題目の後半部分、帝国の西部地域のラテン語化という事象に集中させる形で、テーマの先鋭化・深化作業を行い、研究推進への補助を得られるよう努力していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

① Shiuchi, Kazuoki 'Bilingual Inscriptions in Asia Minor: A Preliminary Survey' "*KODAI*" Vol. 13/14, pp. 103-109, 2007, 査読無。

② 志内一興 「ローマ帝国の歴史とバース出土の「呪い文書」」『歴史と地理(世界史の研究)』220 号、58-62 頁、2009 年、査読無。

〔学会発表〕(計 1 件)

志内一興 「バース出土の「呪詛板」文書 — 司法と宗教のはざままで」第 61 回日本西洋古典学会大会 (於: 山口大学)、2010 年 6 月 6 日。

〔図書〕(計2件)

①志内一興「ラ・グローフザンクの陶工文書：—ラテン語とガリア語の接触について」『神は細部に宿り給う：上智大学西洋古代史の20年』(豊田浩志編、南窓社)、65—88頁、2008年、査読無。

②志内一興「イガエディタニ人に贈られた日時計 —ローマ帝国における「とき」の問題—」『古代地中海世界のダイナミズム』(桜井万里子・師尾晶子編、山川出版社)、154—183頁、2010年、査読無。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志内一興 (Shiuchi, Kazuoki)

研究者番号：60449288

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：